

《今昔物語集》之中譯問題： 以震旦部之漢字表現為中心

蔡嘉琪

世新大學日本語文學系教授

摘要

《今昔物語集》震旦部最早的中譯本為 2006 年金偉、吳彥教授夫婦所共譯，2019 年，張龍妹教授及博士生趙季玉合作出版了第二個中譯本。收錄篇數數量龐大的作品，錯誤或疏漏在所難免，然而在這兩個譯本之中，卻存在著一些共通的問題。仔細對照譯本與《今昔物語集》的原文之後，可知這些共通的錯誤在原文當中同為漢字表現。意即譯者將日文中的漢字表現直接轉化為中文的譯文，這也就是王曉平（2014）認為中文譯者易落入「漢字之癢」的陷阱，所造成的結果。

文學作品之推廣實屬不易，尤其是像《今昔物語集》這種在台灣知名度不高的古典文學作品，姑且不論兩岸字體繁簡及用語等差異，這兩種譯本的問世已經為讀者及研究者帶來了莫大的福音。在前人所奠定的堅實基礎上，提升譯文品質將是下一位譯者的使命。本研究正是基於此一目的，在重新翻譯的同時，彙整出震旦部「謝ス」、「トツグ」、「カリ」、「～ヲ（以テ）業トス」等四個譯法存在疑慮的漢字表現，探討更適當的譯法，進而思索面對漢字表現時中文譯者所應抱持的心態。

關鍵詞：《今昔物語集》、震旦部、中譯、漢字、譯者天職

受理日期：2024 年 07 月 10 日

通過日期：2024 年 10 月 25 日

DOI：10.29758/TWRYJYSB.202412_(43).0009

Issues in the Chinese translation of “Konjyaku Monogatarisyu”: Focusing on the expression of Chinese characters in Section Cathay

Tsai, Chia-Chi

Professor, Department of Japanese Language and Literature,
Shih Hsin University

Abstract

The earliest Chinese translation of Section Cathay of “Konjyaku Monogatarisyu” was jointly translated by Wei Jin and Yan Wu in 2006. In 2019, Long-Mei Zhang and PhD student Ji-Yu Zhao jointly published the second Chinese translation. After carefully comparing the translation with the original text of “Konjyaku Monogatarisyu”, we will find that these common errors usually occur in the original sentences that also use Chinese characters. This means that the translators directly convert the expression of Chinese characters in Japanese into the Chinese translation.

Regardless of the differences in traditional Chinese and simplified Chinese fonts and vocabularies, the publication of these two translations has brought great inspiration to readers and researchers. This study aims to contribute to this goal. By re-translating and summarizing four doubtful translation methods of Section Cathay. The study explores more appropriate translation methods, and then think about the mentality that Chinese translators should have when engaging in the performance of Chinese characters.

Keywords: “Konjyaku Monogatarisyu”, Section Cathay, Chinese translation, Chinese characters, The Task of the Translator.

『今昔物語集』における中国語訳の問題 —震旦部の漢字表現を中心として—

蔡嘉琪

世新大学日本語文学科教授

要旨

『今昔物語集』震旦部の中国語訳、2006年の金偉と呉彦教授夫妻の共同訳が最初で、2019年に張龍妹教授と博士課程の学生趙季玉と共同で二つ目の中国語訳が出されている。収録話数の数が膨大なため、ミスや脱落は免れない。だが、この二つの中国語訳の間に、理解できなかつたり、違和感を覚えたりしている部分が共通している。原文に照らし合わせるといずれも漢字と漢語の部分にあることに気付いた。

文学作品を広めるのは極めて難しいことである。特に『今昔物語集』のような台湾ではあまり知られていない古典文学はなおさらだ。すでに出版された二つの訳本は、読者や研究者にとって大きな貢献を果たしていることは否めない。この礎のうえに、翻訳の品質を向上させるのは次の訳者の使命といえる。それを目指して、中国語訳のかたわら、この二つの訳本に共通する問題を集める。本稿では、震旦部における「謝ス」、「トツグ」、「カリ」、「～ヲ（以テ）業トス」、四つの漢字表現を中心に、中国訳本の問題を考察し、より適宜な訳し方を探り、さらに中国語訳者の漢字表現の扱い方について考えてみたい。

キーワード：『今昔物語集』、震旦部、中国語訳、漢字、訳者の使命

『今昔物語集』における中国語訳の問題 —震旦部の漢字表現を中心として—

蔡嘉琪

世新大学日本語文学科教授

1. はじめに

『今昔物語集』（以下『今昔』と略す）は、天竺、震旦、本朝の三国分立、三十一巻構成、欠文の十九話を含み、1059話も収録される、平安時代後半に当たる院政期に成立した代表的な説話集となる。2006年から最初の中国語訳本が出されてから、これまで中国では六つ、台湾では一つの訳本が出版されている。その中で、三部を含む全訳本はわずか二つしかない。それは2006年に万卷出版社が出版された金偉、呉彦教授夫妻が共訳したものと、2019年に人民文学出版社が出版された北京外国語大学の張龍妹教授が博士課程の学生趙季玉とともに訳したものである¹。残りの五つは本朝部から数話だけを選び出して訳したものである²。

時間と労力を費やして全訳本を出版すること自体は貴重で、読者や研究者にとって大きな貢献を果たしていることは否めない。震旦部の中国語訳の質を比較すると、金呉訳本より、十三年後に出版される張趙訳本は訳抜けはあるが、誤訳が明らかに少なくなった。ただ、実際訳文を確認してみると、誤訳や訳抜けもあれば、的確なイメージが湧かない部分や、違和感を覚える部分も存在している。そして、それらの多くは漢字や漢語の部分であることに気付かされた。しかも原文に照らし合わせるといずれも漢字と漢語の部分にある。本稿では、巻第八の欠巻を除き、震旦部のカテゴリーに分けら

¹ 便宜上、以下前者は「金呉訳本」、後者は「張趙訳本」と略称する。

² 何故選訳本にしたのかというと、『今昔』は海外ではあまり知られていない作品なので、外国の読者にとって興味を持ちそうな本朝部だけに絞って、日本ですでに発行されたものを中国語訳にした方が、コストダウンになると考えられる。

れる巻第六から第十までに見られる漢字や漢語を中心に、池上洵一（1980）と国東文麿（2020）による二つの日本現代語訳を参照し、中国訳本の問題を考察し、より適切な訳し方を考えたい。

2. 先行研究

震旦部の中国語訳はこれまで二つしかないため、管見の限り先行研究も数少ない。王曉平（2014）は金呉訳本巻第六第十三話「震旦李大安、依仏助、被害得活語」の訳文を例に検証し、中国語母語話者の訳者が漢字の誤訳が多いのは、使い慣れた漢字に対する扱いの荒さだという結論を導き出し、その現象を「漢字之癢」（漢字がもたらすはがゆさ）だと名付けている。「因」（原因）に訳すべき「依」、「念」（思念）に訳すべき「恋」などが例として取上げられる。

震旦部の二つの訳本に共通している問題はほかにもまた数多くある。例えば、張趙訳本では巻第九第二十一話の題名を「震旦代洲人好田獵失其女」と訳し、「性好田獵，朝夕以殺生為業，為其所殺生命，數不勝數。」という内容が見られる（p.445）³。これは誤訳ではないのかと疑いつつ、辞書で調べてみたら、なるほど、そういう意味だったのかと、自分の中国語の語学力を嘆かずにはいられない。しかし、考えなおすと、辞書で調べないと翻訳が理解できないのは本末転倒ではないか。ドイツの学者兼翻訳家であるヴァルター・ベンヤミン（Walter Bendix Schoenflies Benjamin、1892-1940）が「翻訳者の使命」（1925）では、このように述べている。

³ 本稿では本文の引用は岩波書店新日本古典文学大系『今昔物語集』による。天竺部は第一冊、震旦部は第二冊、本朝部巻第十一から第十六は第三冊、第十七から第二十五は第四冊、第二十六から第三十一は第五冊である。震旦部の日本現代語訳は講談社は一冊で、平凡社は巻第六と第七が第九冊、巻第九と第十が第十冊と二冊に分けられる。そして、中国語訳の引用に関して、金呉訳本は三冊構成で、天竺部と震旦部は第一冊に包含され、本朝部の巻第十一から第二十は第二冊、巻第二十一から第三十一は第三冊に配置されている。一方、張趙訳本も同じように三冊あるが、本朝部と天竺震旦部に分けられる。本朝部は上下二冊で、巻第十一から巻第十九は上、第十九から第三十一は下に収録されている。天竺震旦部は一冊にまとめられる。便宜上、以下の引用は頁数のみ表示。なお、本文引用の下線部はすべて筆者による。

真の翻訳は透明なものであって、原作を被い隠すことも、その光を遮ることもなく、純粹言語を、それがこの翻訳に固有の媒質^{メーデイウム}によって強められると、それだけいっそう限なく原作のうえに注ぎこむ。それがなによりシンタックスの置き換えにおける逐語性のなしうることであり、この逐語性こそが、翻訳者の原要素^{ウアエレメント}とは文ではなく語であることを証明するのである。なぜなら、文とは原作の言語のまへの壁であり、逐語性はアーケードなのだから (pp.405-406)。

内容の理解が翻訳の最終目的だとしたら、翻訳の「逐語性」⁴が欠かせない。それを求めるために、句でも文でもなく、文の最小要素である語の重要性が問われる、というのがベンヤミンの見解である。そして、次のように割れた器を例に精妙に譬える。

つまり、ひとつの器のかけらを組み合わせるためには、それらのかけらは最も微細な部分に至るまで互いに合致しなければならないが、だからといって同じ形である必要はないように、翻訳は、原作の意味にみずからを似せるのではなくて、むしろ愛をもって細部に至るまで、原作のもっている志向する仕方を己れの言語のなかに形成しなければならない。そうすることによって原作と翻訳は、ちょうどあのかけらがひとつの器の破片と認められるように、ひとつのより大いなる言語の破片として認識されうようになるのである (pp.404-405)。

言語によって、ひびの入り方も異なる。無数のかけらをつなぎ合わせるために、訳者の「愛」が必要とされる。「愛をもって」という言い方はあまりにもポエティックな表現である。疎かにせず、入念に

⁴ 翻訳・解釈などで、文の一語一語を忠実にたどっているかどうかの程度。又は、その質。

一つ一つのかけらを慎重に扱うことが大切だという。だからこそ、本稿では『今昔』という器のかけらとして、漢字の使った慣用表現を切り口として、中国語訳の問題を探りたい。

3. 震旦部における漢字を使った慣用表現の中国語訳

以下、「謝ス」、「トツグ」、「カリ」、「～ヲ（以テ）業トス」、震旦部における四つの漢字表現を中心に、用例を取り上げて、中国語訳の問題を検証する。

3.1 「謝ス」は感謝より謝罪

「謝ス」は他動詞として、謝罪する、感謝する、謝絶する、恨みを晴らすなど、複数の意味がある。巻第七第三十話「震旦右監門校尉、李山龍、誦法花得活語」に一例がある。主人公の李山龍が冥府でいろいろ体験してから生き返ようとするところ、目の前に知らない三人が現れて、強引に報酬を支払わせる。「山龍、惶懼テ三人ニ謝シテ云ク、『我レ愚ニシテ君ヲ不知ズ。家ニ還テ物ヲ備ヘム。但シ、何レノ所ニカ此ノ物ヲ可送キ。其ノ故ヲ不知ズ』ト。」(p.146)とあり、山龍が怯えて三人に謝る姿が描かれている。この一文の現代語訳は、講談社版では略されているが、平凡社版では「わびる」とされている(p.210)。中国語訳を確認してみると、金呉訳本では「謝(過)」と、張趙訳本では「道謝」と訳し、両方とも同様に「感謝」の意味で受け止めている。

なお、巻第九第三十六話「震旦貝圭仁蒨、願知冥道事語」には三つの用例が見られる。主人公仁蒨の弟子文本が鬼をご馳走しようと食事を備えている場面が、次のように述べられている。

其ノ時ニ仁蒨、景ガ二ノ客相具シテ、来リ坐スルヲ見ル。
并ニ、従者百余騎有リ。来テ既ニ彼ノ席ニ坐シヌ。文本、
席ニ向再拝シテ、食ノ不精ヌ事ヲ①謝シテ、「納メ給ヘ」ト
申ス。仁蒨モ亦、景ガ心ヲ知テ、此ノ旨ヲ申シ②謝ス。(中
略)

景、既ニ食シ畢テ後、亦、從ノ騎馬ノ者共ヲ賛リ令坐メテ、此レヲ令食シム。文本、金錢・糸絹ヲ以賛フ。其ノ時ニ、景、深ク喜ビ③謝シテ云ク、「我レ、豈ニ、此ノ事ヲ思ヒ不知ザラムヤ」ト云テ、咲テ去ヌ (p.259)。

①と②は用意した食べ物ともてなしの粗末さに詫げる意味で、③は客の立場として歓待されることに感謝する意味を表している⁵。金呉訳本では、①が「致歉」、②が「感謝」、③が「謝（道）」に訳されている。一方、張趙訳本では、②が訳抜けしているが、①が「謝（以）」、③が「謝（曰）」と訳されている。

単なる「謝」の一文字は、現代中国語では「辞別」、「凋零」、「交替」などの意味のほか、「道謝」、「感謝」、「謝罪」、「謝絶」の意味でよく使われている⁶。ただ、謝するという意味を表したいときは、謝「罪」、謝「過」、賠「罪」、致「歉」、道「歉」のように、「謝」、「賠」、「致」、「道」などの動作の後ろに、後ろめたさを表す名詞の「罪」、「過」、「歉」を加えるのが一般的である。ここから、以上訳文における一文字の「謝」は「感謝」の意と判断でき、訳抜けを除き、金呉訳本の②と張趙訳本の①が誤訳であることが明らかになる。

卷第十第二十話「直心紀札、劍懸猪君墓語」の「紀札、（古老ノ人ノ）教ヘニ随テ、其ノ墓ニ行テ、帶セル所ノ劍ヲ解テ、此ノ榎ノ木ニ懸ケテ、約ヲ謝シ恩ヲ酬テ去ヌ」(p.334)という一文は、主人公紀札が約束を生前に果たせなかったことを猪君の墓の前で詫げる理由の説明である。張趙訳本の「致歉」(p.504)に対し、金呉訳本では「酬謝」と誤訳され (p.413) ている。これは、漢字だけを取って中国語として訳すことがもたらした結果だと考えられる。さらに、『今

⁵ 講談社では①「わびる」②「わび言をいう」③「感謝する」と、平凡社では①「わびる」②「わびる」③「札を述べる」と現代語訳されている。講談社、p.408、平凡社 10、pp.124-125 を参照。

⁶ 「教育部重編国語辞典修訂本」「謝」

〈<https://dict.revised.moe.edu.tw/dictView.jsp?ID=6991&q=1&word=%E8%AC%9D>〉 20240518 閲覧。

昔』における用例は天竺部に一例、本朝部に四例、震旦部の十三例を加えて、全部で十八例ある⁷。十八例中、卷第九第三十六話「震旦貝圭仁蒨、願知冥道事語」の③が感謝の意を表す以外、すべて「謝罪」の意味となる。検証した結果、金呉訳本は訳抜けが一例、「感謝」と誤訳したのが五例あるに対し、張趙訳本は訳抜けが一例、「感謝」との誤訳が二例、そして全く違う訳し方の二例⁸を合わせて、同じ五例ある。

3.2 人に「トツグ」

小学館『全文全訳古語辞典』⁹では、「とつぐ」は「異性と関係する」、「結婚する」と二通りの意味が並べてある。旺文社『古語辞典』では、同じように二つの意味が記されており、それぞれ『今昔』の用例が引用してあるところが興味深い。『今昔』は「『とつぐ』文学」だと、山口仲美（2018）はいう『今昔』におけるすべての用例を検証した結果、『今昔』は「トツグ」という表現を愛用し、使い方にも特徴的であることと指摘する（p.249）。

『今昔』において、「トツグ」は「娶グ」、「嫁グ」、「婚グ」と三つの表現に当てはまり、六十六例中¹⁰、もっとも馴染みのある「嫁に行く」という意味が含まれる「結婚」の意を表しているのは三十例のみで、半分も満たしていない。なお、女性が男性に「トツグ」例のみならず、反対に男性が女性に「トツグ」場合に用いられる例も少なくないことが、山口（2018）の検証によって明らかにされている。言い換えれば、「トツグ」は現代語では「嫁」という漢字が多用され、主に「嫁に行く」ことに絞られているが、平安時代では「婿に行く」

⁷ 天竺部の一例は卷第二第二十三話にある。本朝部は第十一卷の第二話に二例、第九話と第十四話に一例ずつ見られる。震旦部の十三例は卷第七の第四話、第十三話、第十七話、第三十話、卷第九の第二十二話、第三十二話、第三十四話（二例）、第三十五話、第三十六話（三例）、卷第十の第二十話にある。

⁸ 卷第二第二十三話に「自陳己過」（自らあやまりを述べる）、卷第十の第二十話に「以贖我罪」（自分の罪を償う）と訳されている。

⁹ Japanknowledge

〈<https://japanknowledge.com/psnl/display/?lid=200380001390600>〉20240327 閲覧。

¹⁰ 念のため、『今昔物語集索引』で再検索してみると、六十七例（「娶」三十三例、「嫁」二十五例、「婚」九例）が見られ、山口の検証結果より一例多い。ただ、山口の論では詳しく取り上げられていないため、その間の差異は不明。

の場合にも通用されている。嫁、婿の区別がないのは「通い婚」、「妻問婚」のような結婚制度が主であった時代背景もかかわっていると考えられる。

では、ほかの用例はどんな意味なのかというと、山口によると、残りの三十六例は人間同士だけでなく、人間が動物（犬など）や物（蕪など）に、あるいは動物（蛇など）が人間に対する「交接」の行為を指しているという。以上まとめたように、「異性と関係する」の範疇を超える、『今昔』ならではの使い方が非常に目立つ。ここで、本文を引用のうえ、現代語訳を参照しながら、「トツグ」にまつわる中国語訳の問題の検証を進めよう。

巻第六第五話「鳩摩羅焰奉盗仏伝震旦語」は鳩摩羅焰が天竺から仏像を盗んで震旦へ持っていくという仏教伝来の話である。途中亀茲国で一息ついていたところ、その国の国王に引き留められ、無理やりに娘を嫁がせて、そのうち子が生まれたら、代わりに初志を貫くことができると強く勧められる。本文では、「娶（テ/グ）」という表現は国王の娘との関係を述べる部分に集中している。

聖人既ニ①娶テ後、懷妊スル事ヲ待ツト云ヘドモ、懷妊スル事無シシ。

王怪テ蜜ニ娘ニ問テ宣ハク、「聖人ノ②娶グ時何ナル事カ有ル」ト。娘答テ云ク、「口誦スル事有リ」ト。王此レヲ聞テ宣ハク、「此レヨリ後、聖人ノ口ヲ塞テ令誦ル事無カレ」ト。然レバ、娘ノ、王ノ言ニ随テ③娶グ時、聖人ノ誦セムト為ル口ヲ塞テ不令誦ズ。其ノ後懷妊シヌ。聖人ハ、幾ノ程ヲ不經ズシテ死給ヒヌ。此ノ聖人、王ノ言実ナレバ④娶グト云ヘドモ、本心不失ズシテ無常ノ文ヲ誦シ給ケル也（pp.19-20）。

娘を聖人に共寝させて子を作ろうという国王の思いと裏腹に、その兆しは一向に見えない。娘に事情を聞いたら、子供ができない原

因は聖人の念誦だと判明する。そして、国王は娘に夜の営みの時、口を塞げばいいだろう、と入れ知恵を伝授する。この話は出典不明だが、『打聞集』第八話「鳩摩羅佛盜事」¹¹に同文的同話が見られる。

現代語訳に照らし合わせると、講談社の①だけは「妻にして」と訳出し、②、③、④は「枕を交わす」と訳している。平凡社において、①は「同衾」、②は「寝る」、③と④は「交わす」と訳されており、すべて「関係を持つ」ことであると説かれている。四例中、①において、講談社が婉曲に訳しているのに対し、平凡社が直接的に訳している。さて、中国語訳の該当箇所を確かめてみよう。

公主①嫁給聖人後一直沒有懷孕。

國王悄悄地問公主道：「聖人②娶你後都在做什麼事？」公主答到：「口誦經文。」國王聽後說道：「今後堵上聖人的嘴不讓他誦經。」公主聽從國王的話堵上聖人的嘴不讓他誦經。公主懷孕不久後，聖人便去世了。這位聖人雖然聽從國王的勸說④娶了公主，但是本心不失，常誦無常經文（金吳訳本、p.258）。

聖僧與公主①完婚，惟待公主懷孕，然久久為果。

國王甚覺奇怪，偷偷問女兒曰：「聖僧②與你交合之際，可有何事發生？」女兒答曰：「其時，聖僧口中誦佛。」國王聞聽，曰：「今後堵住聖僧之口，不許其誦佛。」公主聽父王言，再③交合時，堵住聖僧誦佛之口，不許其誦佛。其後，公主懷孕。聖僧不久離世。此聖僧因國王所說有理，④娶公主為妻，然其不失本心，常誦無常法文（張趙訳本、p.332）。

¹¹ 直接の影響関係は断言できないが、『今昔』は『打聞集』的な資料を参照して、本話を含む巻第六冒頭の六話を成立しているという（宮田尚、1993、pp.268-293を参照）。『打聞集』の該当部分は「王、泣くゞのたまひければ、此御むすめにたゞ一夜寝にけり。聖其後いくばくなくて、うせにけり。王のむすめ、はらんで男子生てけり。」とあり、「トツギ」という表現は使われていない（pp.67-70）。

このように、本文における四つの「娶グ」は、金呉訳本では③が訳抜けされ、ほかの三つは表的な「結婚する」の意味で受け止められるため、「嫁/娶」に訳されている。一方、張趙訳本では、①と④は同じように「結婚」と解釈されている。そして、②と③は「交合」と、より文語的な言い方に訳されている。二つの訳本の訳し方に大きな齟齬が生じる。

では、「トツギ」の中国語訳を確かめるために、もう一話を見てみよう。巻第十第十九話「不信蘇規、破鏡与妻遠行語」には、主人公の蘇規が遠くへ赴任する前に、妻と約束を交わす場面に用例が見られる。

「我レ、国王ノ使トシテ遠キ州へ行ク。汝ト不相見ズシテ久クアルベシ。然レバ我レ、⑤他ノ女ニ不可娶ズ。汝亦、他ノ男ニ不可近付ズ。此レニ依テ、一ノ鏡ヲ二ニ破テ、半ハ汝ニ預ム、半ハ我レ持テ行ム。若シ我レ、⑥他ノ女ニ娶バ、我ガ半ノ鏡必ズ飛ビ来テ、汝ガ鏡ニ可合シ。亦若シ、汝ヂ、⑦他ノ男ニ娶バ、亦汝ガ持タル半鏡飛ビ来テ、我ガ半鏡ニ可合シ」ト契ルニ、妻喜テ半鏡ヲ得テ、箱ノ内ニ納メテ置キツ (p.332)。

お互いの潔白を証明するために、鏡を割り、それぞれ半分を持ち、二人が離れている間にどちらかが、もしほかの人に「トツゲバ」、鏡が相手の元へ飛んでいき合体するという奇妙な約束を取り付ける。蘇規が旅立ってからしばらくして、ある日、妻の持った半分の鏡が蘇規のところに飛んでいき、蘇規の持っている半分の鏡にぴったりと合って一つになった。そこで、「我ガ妻忽ニ約ヲ誤テ、⑧他ノ男ニ娶ニケリ」と、蘇規は妻の不貞を知ってしまうのである (p.333)。

同文的同話である『注好選』上「蘇規は鏡を破る」第七十五の該当箇所を引用し、「由は、若し吾他の女を娶ぎせば、此の半ばの鏡飛び来りて君が鏡に合へ。若し君他の男に有らば、亦以て此の如し」(p.267)となる。『今昔』に比べると、より簡潔に述べられており、

脚注には、「有らば」は「娶がば」に通じ、密通や不倫を意味すると補足されている。

講談社と平凡社の現代語訳において、「トツグ」は「触れる」や「近付く」とぼかしたり、「関係する」、「関係を持つ」、「情を通じる」、「膚をかわす」とあいまいな言葉で言い換えたりしている。明らかに婚姻関係にある蘇規と妻の二人にまつわるこの一話では、「娶グ」は単純に「結婚する」の意味ではなく、配偶者以外との不貞行為を指している。そこで、中国語訳の該当箇所を取り上げて確認したい。

「我作為國王的使者要去遠方，恐怕很久見不到你。我⑤不娶別的女子，你也不要親近別的男人。把這個鏡子破為兩半，一半你收好，一半我帶走。如果我⑥娶了別的女子，我這半鏡子就會飛回來和你的鏡子合到一起。如果你⑦有了別的男人，你那半鏡子就會飛回來和我的鏡子合到一起。」（中略）蘇規知道妻子違約⑧有了別的男人（金吳訳本、p.412）。

「我為國王御使，遠行他州，將久不得與汝相見。然我⑤不另娶他妻，汝亦不可親近其他男子。今破此鏡，一分為二，一半留汝，一半與我同行。我若⑥娶別妻，此鏡定飛來與此會合。汝若⑦嫁他男，汝所持半鏡將飛來，與我之鏡會合。」（中略）蘇規知妻不久毀約，⑧另嫁他人（張趙訳本、pp.502-503）。

引用内容のように、金吳訳本では「娶/娶了」、「有了」、張趙訳本では「娶」、「嫁」と訳されている。中国語では、「有（了）」は「男女関係を持つ」を指している。だが、一夫多妻制の中国古代では、男は妻のほかに妾を迎えることは、「娶妻」ではなく、「納妾」と表していた。妻以外に妾も迎えられる男性に対し、女は二人の夫を持つのは恥ずべき行為と見なされていた。『今昔』「不信蘇規、破鏡与妻遠行語」における四つの「娶グ」は、「結婚する」の意味としての「娶」

と「嫁」を用いるより、「有了（別人）」（心が他に移る/ほかの人と関係を持ってしまう）、「跟了（別人）」（人についていく）に訳した方が適切ではないか。

ここまで「鳩摩羅焰奉盜仏伝震旦語」と「不信蘇規、破鏡与妻遠行語」二話の考察をとおして、中国語訳者が震旦部の内容を深く分析することなく、原典の漢字を中国語として用いる傾向があることがあらためて確認できた。

3.3 災いをもたらす「カリ」

張趙訳本を繙いてみたところ、震旦部に注意を引く表現がある。巻第九第二十一話の題名「震旦代洲人好田獵失其女」のとおり、「性好田獵，朝夕以殺生為業，為其所殺生命，數不勝數。」と主人公に関する情報が記されている。それから、同巻の第二十二、二十五、二十六の三話を続けて、類似表現が繰り返されている。この「田獵」は、畑での狩猟ではなく、鳥の「カリ」を指す。

「カリ」は『今昔』では、「仮」、「狩」、「獵」、「雁」、「獺」、「田獵」、「田獺」、「狩獵」、「畋獵」、計九つの漢字に当てはまる。その中で、明らかに関連性のない「仮」と「雁」¹²を除き、すべて「狩獵」を意味している。例えば、「畋」という字は「田」の異体字の一つで、動詞として、「耕種（耕し）」と「狩獵」と二通りの意味を持っている。また、「狩」は鳥獣を追いかけて捕らえることを指し、「獵」と同義で、「狩獵」という熟語でよく使われている。なお、「獺」も「獵」の異体字として、同じ意味で用いられる。このように、「狩」、「獵」、「獺」、「田獵」、「田獺」、「狩獵」、「畋獵」、この七つの表現は、一文字でも、二文字でも、漢字や組み合わせが異なっても、「耕し」の意味がなく、「狩獵」の意味合いしか残っていない。七つの中で、『今昔物語集索引』では、「狩」が二十一例あり、もっとも多い使用例となる。その次は「獵」、「獺」、「田獵」の三つで、ともに四例ある。

¹² 「仮」は仮に、仮設の意味で、「雁」は鳥のガンの訓読みとして使われている。「教育部異体字字典」「獵」
(<https://dict.variants.moe.edu.tw/dictView.jsp?ID=27389&q=1>) 20240323 閲覧。

「田獵」、「狩獵」、「畋獵」はおのおの一例だけある。だが、「田獵」、「田獵」、「畋獵」三つの表現が震旦部に集中しているのは留意すべき点である¹³。

狩獵といえば、今我々の頭に浮かぶのは鳥獸を追いかけて捕らえるイメージであろう。しかし、それは中国古代では特別な意味合いで使われていた言葉である。農耕が定着する前の時代、禽獸の肉を食べたり、皮を剥いて身に着けたりする狩獵という行為は、人間が生活するための主な手段である。そのうち、農耕が始まり、狩獵が必要とされなくなる。『春秋左氏伝』では、桓公四年に「四年、春、正月、公狩於郎。」という記事があり、注釈書の『穀梁伝』では「四時之田、皆為宗廟之事也。春日田、夏日苗、秋日搜、冬日狩。四時之田用三焉、唯其所先得。一為乾豆¹⁴、二為賓客、三為充君之庖。」と補足されている。つまり、冬場なら「狩」というものの、春は「田」と、同じ行為は季節ごとに言い方が変わる。そして、祭祀、宴会、食糧の順番が目的として行われていた。農耕が定着し、狩獵は単なる暮らしを維持する手段でなくなってから、祭祀のために生贄を得ることを指し、次第に政治的な儀式にと変わりつつある。

さて、『今昔』における「カリ」の用例に焦点を絞ると、天竺部卷第三第二十六話「仏、以迦旃延遣罽賓国語」だけでは、三つの用例が見られる。主人公の迦旃延^{か せんねん}は仏に「昼夜ニ、常ニ①畋獵^{かり}・漁捕ヲ以テ所作トスル」罽賓国^{けいひんこく}に遣わして、衆生を教化するように言われる。そこで、迦旃延はとりあえず国王から始めようと、王宮へと向かう。王宮に着いたとたん、「国王、②狩^{かり}ノ為ニ出立ツ時也。数千万騎ヲ相具セ。」という情勢にあった。お前は何者かと聞かれると、「迦旃延答テ云ク、『大王ハ極テ美ク在マス、我レハ極テ弊シ。我レ大王

¹³ 「田獵」の四例中震旦部卷第九に三例ある。「田獵」の一例は震旦部卷第十にある。「畋獵」の三例中震旦部卷第九に二例見られる。

¹⁴ 『春秋左氏伝』は中國哲學書電子化計劃〈<https://ctext.org/chun-qi-u-zuo-zhuan/huan-gong-si-nian/zh>〉、『穀梁伝』中國哲學書電子化計劃〈<https://ctext.org/guliang-zhuan/huan-gong-si-nian/zh>〉より。「乾豆」とは祭事に使う肉を干した干物である。

ノ③御狩ニ前ニ立テ行ム』ト。」(pp.265-266)。金吳訳本では②と③を「狩獵」と訳されているが、①の「畋獵」を念入りに「田獵」と訳されている(p.146)。一方、張趙訳本では、①と③は「狩獵」、②は「打獵」に訳されている(p.199)。

なお、震旦部で「孝養」を巻名とした巻第九において、「カリ」により災いを招く話が四話連なっており、関連表現は冒頭部に集中している。該当箇所は次のように引用し、二つの中国語訳に照らし合わせて確かめよう。

表 1 巻第九「カリ」の用例と中国語訳

『今昔』原文	金吳訳本	張趙訳本
今昔、震旦ノ隋ノ開皇ノ末ノ比、代州ノ人、姓ハ王也。公ニ仕ヘテ、驃騎ノ將軍ト成レリ。亦、荊州ノ鎮守ニ有リ。此ノ人、性、本ヨリ④畋 ^{かり} 獵ヲ好ムデ、朝暮ニ生命ヲ殺スヲ役トス。殺セル所ノ物、多クシテ員ヲ不知ズ。「(震旦代州人、好畋 ^{かり} 獵失女子語」第二十一、pp.214-215)	從前，震旦隋開皇末年，代州有個姓王的人，在朝中任職，他是驃騎將軍，又是荊州鎮守。此人好④田獵，朝暮殺生，不計其數。「(震旦代洲人好田獵失女的故事」第二十一、p.360)	從前，震旦隋朝開皇末年，代洲有一人，姓王。此人在朝為官，為驃騎將軍，鎮守荊州。性好④田獵，朝夕以殺生為業，為其所殺生命，數不勝數。「(震旦代洲人好田獵失其女」第二十一篇、p.445)
今昔、震旦ニ兗州ノ都督、遂ノ安公、季寿ノ始、宗室ト云ヲ以テ王ニ封ズ。貞觀ノ始ニ、職ヲ罷シテ京ノ第ニ還ル。此ノ人、本ヨリ、性、	從前，震旦兗州都督被國王封為遂安公，貞觀初年罷職回京。此人性好⑤田獵，參養了很多獵鷹，經常殺狗餵鷹。「(震旦兗	從前，震旦兗州都督遂安公，季壽初，名宗室，以封為王。貞觀初，辭官回京中府邸。此人性愛⑤田獵，家中獵鷹排成

⑤ <u>田獵</u>^{かり}ヲ好テ、常ニ鷹ヲ多ク聯タリ。然レバ、常ニ、犬ヲ殺シテ鷹ニ飼フヲ以テ役トス。 （「震旦兖州都督遂安公、免死犬責語」第二十二、p.216）	州都督遂安公免死犬責的故事」第二十二、p.361）	行。為此殺犬餵鷹，為平常事。（「震旦兖州都督遂安公免死犬之災」第二十二篇、p.446）
今昔、震旦ノ隋ノ代ニ、鷹楊郎將トシテ天女¹⁵ノ姜略ト云フ人有ケリ。若クシテ⑥ <u>田獵</u>^{かり}ヲ好ムデ、吉ク鷹ヲ放ツヲ以テ常ノ遊ビトス。 （「震旦隋代、天女姜略、好鷹感現報語」第二十五、p.222）	從前，震旦隋代天水的姜略官至驃騎將軍，他好⑥ <u>田獵</u>，常架鷹出游。（「震旦隋代天水姜略好鷹感現報的故事」第二十五、p.364）	從前，震旦隋朝鷹揚郎將中有一天水人，名姜略。此人自幼好⑥ <u>獵</u>，常放鷹遊樂。（「震旦隋朝天水姜略好鷹得現報」第二十五篇、p.449）
今昔、震旦ノ隋ノ上柱国ニ、蒲山ノ惠公李ノ寛云フ人有ケリ。此ノ人ノ性、本ヨリ⑦ <u>田獵</u>^{かり}ヲ好テ、常ニ鷹ヲ仕フヲ以テ業トス。鷹数十ヲ養フ間、昼夜朝暮ニ生命ヲ殺スヲ以テ役トス。（「震旦隋代、李寛、依殺生得現報語」第二十六、pp.223-224）	從前，震旦隋代上柱國蒲山慧公李寛好⑦ <u>田獵</u>，豢養數十隻鷹隼，昼夜朝暮殺生。（「震旦隋代李寛依殺生得現報的故事」第二十六、p.365）	從前，震旦隋朝上柱國蒲山惠公，名李寛。此人性本好⑦ <u>獵</u>，以狩獵鷹為業。養數十隻鷹，晝夜朝暮以殺生為業。（「震旦隋李寛因殺生得現報」第二十六篇、p.450）

¹⁵ 地名「天女」に関して、二つの中国語訳では本文脚注十八の説明に基づいて「天水」と改訳されていると考えられる。

以上示されたように、金呉訳本では一貫して「田獵」と訳されている。張趙訳本でもほとんど「田獵」とされているが、二箇所だけ「獵」に中国語訳されている。「カリ」に当てはまる震旦部の八例中、「獺」が二例、「田獵」が三例、「田獺」が一例、「畋獵」が二例ある。八例中「田獵」に訳されるのは金呉訳本が五例で、張趙訳本が四例見られ、使用頻度がもっとも高い訳し方となる。一方、残り「田獵」と中国訳された一例は天竺部にあり、本朝部には一例も見られない。なぜ「田獵」という現代では馴染みのない訳し方にこだわっているのかというと、『今昔』の原文をそのまま訳語として使おうとする「漢字之癢」によると考えられる。

ここで問題となるのは『今昔』では政治的な意味をもって用いられる用字なのかということと、現代読者の我々が理解できる訳し方であるか、ということの二点である。前述のとおり、「四時之田、皆為宗廟之事也。」の「宗廟」は皇室を指している。テキストを確かめると、巻九の四話中、第二十二話の「兗州ノ都督、遂ノ安公」が「宗室」と明記されている。ほかの三人はそれぞれ「驃騎將軍」、「鷹楊郎將」、「上柱国蒲山恵公」であるが、身分は高いというものの、任命された官職で、王室の血が流れている身分ではない。すなわち、「田獵」という言葉が適用できる身分ではない。たとえ「遂安公」が主人公の第二十二話において、「田獵」に訳せるとしても、普段使われていない言葉なので、辞書を調べて意味を確かめてから、中国語訳が理解できるようになるのでは、訳本としての価値が失われるのではないか。

「狩」、「獵」、「獺」、「田獵」、「田獺」、「狩獵」、「畋獵」、七つの表現は『今昔』の天竺部には九話に十例、震旦部には七話に八例、本朝部には十二話に十九例ある。ここまで①～⑦の七つの表現、そしてそれに当たる中国語訳を考察した結果を、二つにまとめることができる。一文字の「狩」と「獵」は本朝部を中心に使用され、異体字の「獺」、また「田獵」、「田獺」、「狩獵」、「畋獵」はほとんど震旦部と天竺部に集中されていることが一つ目である。なお、ここから

も訳者の異なる個性が表れる。「田獵」を除き、金呉訳本と張趙訳本とでは「狩獵」、「打獵」が多用されているが、金呉訳本は訳抜けが多いのに対し、張趙訳本は「射獵」、「出獵」、「行圍射獵」、「圍獵」¹⁶など、訳し方のバリエーションが豊富である。

3.4～ヲ（以テ）業トス

『今昔』の冒頭部には人物を紹介する際、「～ヲ業トス」、「～ヲ以テ業トス」という慣用表現がよく使われている。「業」は名詞として、「げふ」、「ごふ」、「なり」、複数の読み方がある。サンスクリット語の「カルマ」(karma)の当て字で、「ごふ」と読み、人がこの世で、身、口、意によって起こす行為、または前世の行為によって現世で受ける報いを指し、仏法説話で頻出している。一方、「なり」は「生活のための仕事」を意味し、「なりわい」、あるいは「わざ」と振られ、「げふ」という読み方にも意味が通じる。なお、「げふ」は仕事や職業の意味以外にも「いつも行う事柄、常の事」、または「わざ、技術」の意味も含まれている¹⁷。

『今昔物語集索引』によると、「業」は「ごふ」、「なり」、「わざ」、「げふ」と振り仮名が振られており、その中で、「げふ」の用例はすべて第二巻、つまり震旦部に集中していることが注目に値する¹⁸。

「～ヲ業トス」、「～ヲ以テ業トス」という表現を使った内容の中国語訳は「以～為業」（「～を職業とする」）というパターン化の訳し方が中心となる。しかし、該当部分を逐一確かめてみると、その前の「～」の部分は職業と見なせるのか、と違和感を感じる場合もある。以下数例を取り上げ、中国語訳を検証する。

¹⁶ 「射獵」は弓矢を用いて狩獵をすること、「出獵」は狩獵に出ること、「行圍射獵」と「圍獵」は集団による囲い込み獵を指している。いずれも単なる「狩獵」ではなく、そのうえに違う意味を付け加える加訳となる。

¹⁷ 『学研全訳古語辞典』〈<https://kobun.weblio.jp/content/%E6%A5%AD>〉、japanknowledge 〈japanknowledge.com/psnl/display/?lid=2002011f1bd7mrm4gFw0〉20240501 閲覧。

¹⁸ 「業」に振り仮名がついていたり、ついていなかったりしているが、その基準は不明である。以下、テキストのままに引用している。

表 2 「～～（ヲ以テ）業トス/役トス」の用例と中国語訳

『今昔』原文	金吳訳本	張趙訳本
（紀曆ハ）年来海辺ニ住シテ、①<u>網ヲ持テ海ニ出テ魚ヲ捕ルヲ以テ朝暮ノ業トス</u>。（卷第十二「」第十四、p.122）	紀麻呂長年住在海邊，①他持網出海，<u>以捕魚為生</u>。（第十四「紀伊國人漂泊海上得佛救助的故事」、p.525）	他住在海邊，多年來總是①<u>攜帶魚網出海，專以捕魚為業</u>。（第十四篇「紀伊國人落海藉佛力得救」、p.101）
今昔、震旦ノ并州ニ僧有リ。名ヲ僧感ト云フ。心ヲ発シ、②<u>觀無量壽經・阿彌陀經ヲ持テルヲ以テ業トシテ</u>（後略）。（卷第六「震旦僧感、持觀無量壽經阿彌陀經語」第四十四、p.84）	從前，震旦并州有位僧人名叫僧感，發心②<u>以持《觀無量壽經》和《阿彌陀經》為業</u>。（第四十四「震旦僧感持觀無量壽經阿彌陀經的故事」、p.295）	從前，震旦并州有一僧人，名僧感。此人發心②<u>以持《觀無量壽經》《阿彌陀經》為業</u>。（第四十四篇「震旦僧感持《觀無量壽經》《阿彌陀經》」、p.375）
（惠果和尚ハ）瓦官寺ト云フ寺ニ留マリ住テ、③<u>法花・十地等ノ經ヲ読誦スルヲ業トス</u>。（卷第七「豫州惠果読誦法花經救廁鬼語」第二十一、p.127）	（惠果和尚）入京師③<u>瓦官寺誦讀法華、十地等經為業</u>。（第二十一「豫州惠果誦法華經救廁鬼的故事」、p.318）	（惠果和尚）入都城建康，留住瓦官寺，③<u>以誦讀《法華經》、《十地經》為業</u>。（第二十一篇「豫州惠果誦讀《法華經》救廁鬼」、p.400）

宣徳、④-1 <u>本ヨリ</u> あくごふ <u>悪業トシテ不造ザル</u> <u>事無シ</u>。(中略) 「汝ヂ、極テ愚痴ニ シテ、④-2 <u>悪ヲ造ル</u> <u>ヲ以テ業トス</u>。」(巻 第六「孫ノ宣徳、書写 花嚴經〔語〕」第三十 五、p.72)	(宣徳) ④-1 <u>無惡不</u> <u>作</u>。 「你極痴愚，④-2 <u>造</u> <u>惡為業</u>。」(第三十五 「孫宣徳書寫華嚴經 的故事」、p.288)	且此人④-1 <u>原本無惡</u> <u>不作</u>。 汝甚愚痴，④-2 <u>作惡</u> <u>多端</u>。」(第三十五篇 「孫宣徳書寫《華嚴 經》」、p.367)
此ノ人ノ性、本ヨリ 田獵ヲ好テ、⑤<u>常ニ</u> <u>鷹ヲ仕フヲ以テ業ト</u> <u>ス</u>。鷹數十ヲ養フ間、 <u>昼夜朝暮ニ生命ヲ殺</u> <u>スヲ以テ役トス</u>。(巻 九「震旦隋代、李寛、 依殺生得現報語」第 二十六、pp.223-224)	李寛好田獵，⑤<u>豢養</u> <u>數十只鷹隼，昼夜朝</u> <u>暮殺生</u>。(第二十六 「震旦隋代李寛依殺 生得現報的故事」、 p.365)	此人性本好獵，⑤<u>以</u> <u>狩鷹為業</u>。養數十只 <u>鷹，晝夜朝暮以殺生</u> <u>為業</u>。(第二十六篇 「震旦隋李寛因殺生 得現報」、p.450)
此ノ二ノ人、三日ヲ 不過ズ、常ニ相ヒ互 ニ行き会テ、⑥<u>酒ヲ</u> <u>呑ムヲ以テ業トス</u>。 (巻第十「利徳明徳、 興酒常行会語」第四 十、p.380)	他們倆不過三日⑥<u>便</u> <u>聚在一起喝酒</u>。(第四 十「利徳明徳常會飲 酒的故事」、p.433)	二人不出三日⑥<u>便串</u> <u>門飲酒，以此為樂</u>。 (第四十篇「利徳明 徳常聚首飲酒」、 p.527)

本朝部卷第十二「紀伊国人、漂海依仏助存命語」第十四の①はの物語の書き出しは、主人公が漁師として暮らしていたというものである。ここでは、二つの中国語訳は「以捕魚為業(生)」で一致している。一方、震旦部卷第六第四十四「震旦僧感、持観無量寿経阿弥

陀經語」の②も冒頭部にあり、主人公の基本情報を提供する内容に当たる。卷第七第二十一「豫州惠果読誦法花經救廁鬼語」の③も類似している。二つの中国語訳の間にわずかな異同はあるが、「～ヲ業トス」は「以～為業」に訳されるのが合致している。

『説文解字』では、「業」はもともと楽器をかけるためのこぎりの形にした大きな板と説明している¹⁹。名詞として用いられる場合は、仕事、学習の過程、財産、功績など複数の意味を持っている。日本の古文と重なる意味はあるにもかかわらず、異なった意味で用いられることも少なくない。中国語では「以～為業」は「～を職業としている」という意味で理解されている。では、②の僧感は『観無量寿經』・『阿弥陀經』、そして、③の惠果は『法花』・『十地』等を読誦することを職業としている、という意味で合っているだろうか。現代語訳を確かめると、「つねに読誦し続けていた」、「つねのこととしていた」（講談社、p.179、242）、「行業として過ごしていた」、「もっぱらの勤めとし」（平凡社、p.123、184）と解かされている。まとめると、「いつも行ふ事柄、常の事」という意味を表している。殊に、古代では紙は貴重品で、僧侶にとって、教典を写して手元におくのは決して簡単なことではない。内容の長い經典を繰り返し暗記することは出世方法の一つとなる²⁰。よって、僧感も惠果も紛れもなく同じ状況に置かれており、「以～為業」より、經典を繰り返し暗記するという意味が強調した「經常誦讀」、「以誦讀～為志業」に訳した方が適切ではないか。

卷第六「孫ノ宣徳、書写花嚴經〔語〕」第三十五に二例が見られ、その中の④-1の「悪業」は悪い行為を指している仏語で、二つの中国語訳では「無惡不作」と訳されている。問題は④-2の「悪ヲ造ルヲ以テ業トス」となる。『今昔』の脚注に「なりわい、専門としていた。」と説明されている。張趙訳本では「作惡多端」に訳されている。

¹⁹ 「業：大版也。所以飾縣鍾鼓。捷業如鋸齒，以白畫之。象其鉏鋤相承也。从𠂔从巾。巾象版。」中國哲學書電子化計劃『説文解字』〈<https://ctext.org/dictionary.pl?if=gb&char=%E6%A5%AD>〉20240428 閲覧。

²⁰ 「宗教」ものしり 25 の史料（山中裕『平安時代大全』、p.239）を参照。

しかし、金吳訳本の「造惡為業」は、「業」という漢字の影響のもとで生まれた「カルマ」でもなく、「職業」でもなく、あやふやな訳し方になる。

似たような例は巻九「震旦隋代、李寛、依殺生得現報語」第二十六にある。冒頭部に主人公李寛の悪習を描くことにより、読者に対して、物語の展開に共感を呼ぼうとしている編纂志向が垣間見られる。⑤の文末に、「役^{やく}トス」という表現も使われており、「業トス」に同じと脚注に補足されている。ちなみに、「役」に格助詞の「と」が付いて副詞となり、「もっぱら」、「そればかり」、「ひたすら」と意味している²¹。金吳訳本では、「業トス」と「役トス」が役抜けされている。それに引き換え、張趙訳本では二か所とも「以～為業」で統一している。出典と思われる『冥報記』下六「李寛」の「性好田獵」に照らし合わせると、主人公は鷹を飼い、それを駆使して生き物の命を奪うことが趣味で、そればかり夢中していると述べられるのである。ここでは、「職業」と扱って、「以～為業」という訳し方より、「經常～」、「以～為常事」と訳した方が精度が高いと考えている。

最後は、酒好きの二人にまつわる中国の逸話である。巻第十「利徳明徳、興酒常行会語」第四十の⑥は、主人公二人が「酒ヲ呑ムヲ以テ業トス」人だと冒頭部に述べられている。脚注では、「～ヲ業トス」は「専門、もっぱらとする」と専門をいう慣用表現と説明されている。同話と見なされる『注好選』には「昔、二人の上戸有り。謂はく利徳・明徳なり。三日を過ぎず、相互ひに行きて酒を飲む。」とある（pp.266-267）。比較してみると、両者の内容はほぼ一致しているが、「酒ヲ呑ムヲ以テ業トス」後半の「ヲ以テ業トス」は、明らかに『今昔』独自の加筆と判断できる。

ここで述べられるお酒を飲むという行為は、「専門」より、前文の「三日ヲ不過ズ、常ニ相ヒ互ニ行キ会テ」を受けて、お酒を飲む頻

²¹ 『学研全訳古語辞典』

〈<https://kobun.weblio.jp/content/%E5%BD%B9%E3%81%A8>〉 20240514 閲覧。

度を強調する表現だと考えられる。中国語訳では、両方とも「以～為業」という訳し方にこだわらず、金呉訳本では「他們倆不過三日便聚在一起喝酒」と、「～ヲ業トス」を無視している。一方、張趙訳本では「二人不出三日便串門飲酒，以此為樂。」と、テキストには触れていない対酌の楽しさを表している。ここでは、「習以為常」、つまりしょっちゅうのことと訳した方が意味が合っていると考えている。

以上『今昔』における「～ヲ（以テ）業トス」を使った内容及び中国語訳を考察してきた結果、次のようにまとめることができる。まず、原典や同文的同話などの関連作品に照合してみると、「～ヲ（以テ）業トス」は『今昔』の慣用表現として編者が加筆したものだと認められる。次は、「～ヲ（以テ）業トス」という表現は、漢字に影響されたため、中国語訳では、「以～為業」と訳されることが多い。だが、テキストの意味に合わない場合もある。①のように、「わざ」、「なり」、「ごふ」と読み、「職業」の意味で天竺、震旦、本朝三部にわたって使われており、「以～為業」に中国語訳することに納得できる。しかし、②と③のように「つねに」の意味や、④-2と⑤のように、「～ばかりしている」、「もっぱら～している」の意味や、⑥のように「頻繁に～している」の意味もある。注意深く読んでみない限り、その間の微妙な差異を気付けることなく、そのまま読み通していつてしまう。一概に「以～為業」に訳すのは誤解を招きやすいので、柔軟性を持ち、「經常～」、「以～為志業」、「以～為常事」、「習以為常」など、文脈に沿って使い分けるべきだと提案したい。

4. おわりに

『今昔』の震旦部を中心に、漢字をめぐる表現、そして中国語訳の問題を検証してきた。その問題をまとめると、まず、「謝ス」という表現は、『今昔』においての用例は震旦部に集中している。「感謝」を表す一例を除き、すべて「謝罪」の意味を表している。訳抜けや「感謝」との誤訳は二つの中国語訳本でも見られる。翻訳する際、

「謝」、「賠」、「致」、「道」など動作の後ろに、名詞「罪」、「過」、「歉」加えて、「謝罪」、「賠罪」、「道歉」、「致歉」など、熟語の形にすることで、より精確な意味が伝えられると考えられる。

「トツグ」という表現は、『今昔』では「娶グ」、「嫁グ」、「婚グ」三つの漢字に当てはまり、「嫁に行く」と「婿に行く」が含まれる「結婚」の意味で使われている。ところが、人間同士、または人間が動物（犬など）や物（蕪など）に、あるいは動物（蛇など）が人間に対する「交接」など、『今昔』ならではの特徴的な使い方がある。震旦部における二話の考察をとおして、「結婚」の意味もあれば、人と「情を通じる」や「関係を持つ」を表すのが主となっていることが判明できる。しかし、訳者が漢字につられて躊躇せず「結婚」と訳した結果、訳文に齟齬が生じてしまう。「結婚」を表したい場合は立場によって「娶」と「嫁」に訳すことができる。ところが、「関係する」を示したいときは、「有了（別人）」、「跟了（別人）」に訳せば、文芸性を兼ね、と同時に『今昔』の「生々しさ」や「野性」²²を表しだすこともできるだろう。

なお、震旦部において、したら決まって災いをもたらす「カリ」は、「狩」、「獵」、「獺」、「田獵」、「田獺」、「狩獵」、「畋獵」、七つのパターンで示されているものの、すべて「狩獵」をいつている。その中で、「田獵」、「田獺」、「畋獵」三つが震旦部でしか見られない。巻第九の用例を検証した結果、「田獵」に中国語訳する傾向が明らかになる。そもそも、「田獵」というのは、古代中国の王室が生贄を捕獲するために行う政治的な意味を持つ用語である。ここで用いられるのは、正確さに欠ける一方、現代読者にとっても馴染まない表現となる。

「～ヲ（以テ）業トス」は、人物を紹介するとき、よく使われている表現である。漢字の影響で、主に「以～為業」と中国語訳されている。そのほか、仏法説話では、「業」は「カルマ」の当て字とし

²² 芥川龍之介（1927）が「今昔物語鑑賞」において、『今昔』の魅力を語っている。

て、現世及び前世の行為によってもたらした報いを指している。さらに、「つねに」、「～ばかりしている」、「もっぱら～している」と作中人物が頻繁に行う行為を表す場合もある。不問に「以～為業」ではなく、「經常～」、「以～為志業」、「以～為常事」、「習以為常」など訳し方を工夫したほうが、読者に物語の内容をより理解させ、『今昔』の真価を伝えることもできるのではないか。

このように、一見あまり肝心ではない漢字表現の訳し方に注目、考察することで、訳本の品質向上に役立つのかと疑う人もいるかもしれない。たとえ瑕疵があっても、全訳本の出版は、読者はもちろん、研究者にとって極めて貴重な貢献に相違ない。本稿では非難する立場もないし、するつもりはみじんもない。ただ、一読者として、違和感の源を見つけて、解決しようとしている一心である。ここまで見てきたように、震旦部における漢字の慣用表現を訳文として使うことは、まさしくベンヤミンが言っていた割れた器の最も微細なかけらが、お互いに合致できずに生まれた違和感の原因となる。それは中国語訳者が漢字に対する態度によるものだと、王（2014）がすでに指摘している。中国語訳者にとって、漢字はよく知っているものなので、時間をかけて調べる手間が省けるのだという思い込みが激しい。ところが、それはかえって翻訳時の落とし穴に陥る主因となる。

異質な言語の内部に呪縛されているあの純粹言語をみずからの言語のなかで救済すること、作品のなかに囚われているものを言語置換^{ウムデイヒトウング}〔改作〕のなかで解放することが、翻訳者の使命にはほかならない。この使命のために翻訳者は自身の言語の朽ちた柵を打ち破る（ベンヤミン、pp.407-408）。

翻訳者の使命は、異なった言語から純粹言語を解放することだとベンヤミンはいう。その使命を果たすために、異質な言語の間にある朽ちた柵を打ち壊さなければならない。だからこそ、漢字と中国語

との間の柵を打ち壊そうとする。すなわち、同一視せず、両者の区別をつけることが、中国語訳者であるからこそその第一歩ではないか。

〈付記〉

本論文は、国科会専題研究計画 MOST111-2423-H-128-001-MY2 の研究成果の一部である。

引用本文

池上洵一校注（1993）新日本古典文学大系 35『今昔物語集』三、東京、岩波書店

池上洵一訳注（2008）東洋文庫 379、383『今昔物語集 9、10 震旦部 I、II』、東京、平凡社

金偉、呉彦訳（2006）『今昔物語集一』、瀋陽、万卷出版公司

國東文麿訳（2020）「講談社学術文庫『今昔物語集 震旦篇』全現代語訳、東京、講談社（1983-1984 年講談社学術文庫『今昔物語集』（六）～（九）より抜粋、再編集）

小峯和明校注（1999）新日本古典文学大系 34『今昔物語集』二、東京、岩波書店

小峯和明校注（1994）新日本古典文学大系 36『今昔物語集』四、東京、岩波書店

今野達校注（1999）新日本古典文学大系 33『今昔物語集』一、東京、岩波書店

張龍妹、趙季玉訳（2019）『今昔物語集：天竺震旦部』、北京、人民文学出版

森正人校注（1996）新日本古典文学大系 37『今昔物語集』五、東京、岩波書店

参考文献

芥川龍之介（1927）「今昔物語鑑賞」（新潮社版『日本文学講座』第六卷初出）、日本文学研究資料刊行会編（1970）『今昔物語集』

- 日本文学研究資料叢書、東京、有精堂、pp140-143
- 内村博信訳（1996）「翻訳者の使命」『ベンヤミン・コレクション 2 エッセイの思想』、東京、筑摩書房、pp.388-411
- 王晓平（2014）「《今昔物語集》漢訳的文字学研究」、『中日文学經典的伝播与翻訳』（下）、北京、中華書局、pp.898-982（初出「日本文學翻譯中的“漢字之癢”」『日語學習与研究』5（2010）、pp.101-118
- 小峯和明編（2001）『今昔物語集索引』新日本古典文学大系別巻、東京、岩波書店
- 説話研究会編（1999）『冥報記の研究』第一巻、東京、勉誠出版
- 中島悦次校注（1942）『打聞集』、東京、改造社
- 松尾譲児（2012）「今昔物語集と訓点資料—『冥報記』前田家本をめぐって—」、『訓点語と訓点資料』128、京都、訓点語学会、pp.69-84
- 松村明、山口明穂、和田利政編（1996 重版）、『古語辞典』第八版、東京、旺文社
- 馬淵和夫、小泉弘、今野達校注（1997）『三宝絵・注好選』新日本古典文学大系 31、東京、岩波書店
- 宮田尚（1993）『今昔物語集震旦部考』、東京、勉誠社。
- 山口仲美（2018）『言葉から迫る平安文学 3—説話・今昔物語集』、東京、風間書房

データベース・オンライン辞書

小学館『全文全訳古語辞典』japanknowledge

〈<https://japanknowledge.com/psnl/display/?lid=200380001390600>
〉20240327 閲覧

『学研全訳古語辞典』〈<https://kobun.weblio.jp/>〉

「教育部異体字字典」「獵」

「<https://dict.variants.moe.edu.tw/dictView.jsp?ID=27389&q=1>」
20240323 閲覧

「教育部重編國語辭典修訂本」「謝」

〈<https://dict.revised.moe.edu.tw/dictView.jsp?ID=6991&q=1&word=%E8%AC%9D>〉 20240518 閱覽

『穀梁伝』中國哲學書電子化計劃 〈<https://ctext.org/guliang-zhuan/huan-gong-si-nian/zh>〉 20240327 閱覽

『春秋左氏伝』中國哲學書電子化計劃 〈<https://ctext.org/chun-qiuzuo-zhuan/huan-gong-si-nian/zh>〉 20240330 閱覽

『説文解字』中國哲學書電子化計劃

〈<https://ctext.org/dictionary.pl?if=gb&char=%E6%A5%AD>〉
20240428 閱覽